

- 日 時：2019年8月11日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「洗礼は、神に正しい良心を願い求めること。」
- 聖 書：旧約 列王記上 19：9-21（p566）  
新約 ペトロの手紙一 3：13-22（p432）
- 讃美歌：227「主の真理は」 495「しずけき祈りの」

お早うございます。

8月11日の今日は、2つのことをお話ししたいと思います。

私たち日本人にとって、8月は特別な月です。

前半は先週に続いて、先の大戦について考え、後半は洗礼についてお話しします。

いずれも、立川教会に呼び集められ、キリスト者として平和を造り出す使命を神様から与えられている私たちにとって、大切なことを教えています。

初めに、敗戦記念日について思うことです。

今週訪れる74回目の8月15日ですが、多くの人々はこの日を終戦記念日と呼び、敗戦記念日とは呼びません。マスコミのほとんどもそうです。

確かに、8月15日に戦争が終わりました。しかし、私たちは、この日を終戦記念日と呼んで済ませてはいけないように思うのです。

その理由お話しします。

例えばの話ですが、もし、あの戦争で日本が連合軍に勝利していたら、私達はこの日を終戦記念日と呼ぶでしょうか。私はそうは思えません。もっと、勝利を意識した言葉を使って、この日のことを呼ぶと思います。

それではなぜ、私たちは8月15日を敗戦記念日ではなく終戦記念日と呼んで来たのでしょうか。それは、敗戦と言う言葉によって、戦争に負けた事実を直視しなくなかったからだと思います。その事実から少しでも身をかかわりたいと言う暗黙の願いがあったからだと思います。その結果、74年を経て、戦争を経験していない者達が社会の多数を占めるにつれ、あの戦争への当事者意識が失われてしまいました。

終戦という言葉は、第三者が、外から眺めて使う言葉のように思います。その言葉からは何ら主体的な響きが聞こえて来ないのです。一体誰が戦争を起こしたのか、誰が日本人310万の戦死者の責任を取るのかなど、あれほどの惨劇を引き起こした主体を問う姿勢を感じることが出来ません。全てが曖昧にされたまま、年月だけが過ぎ、戦争体験の風化が進みました。

同じような問題を孕む言葉があります。

それは、日本を戦争に導いた軍部及び政治家たちが一早く使い始めた一億総懺悔と言う

言葉です。

一億総懺悔と言う意味は、誰が悪いのでもない、皆が悪かったと言うことです。だから皆で懺悔しようと言う呼びかけです。実は、この言葉も又、誰の責任を問うのでもない、戦争に対する無責任な状況を認める日本社会の風潮を造り出しました。

そして、良く考えてみると、当時の日本の人口は 1 億ではありません。記録を調べれば 7,200 万です。7,200 万しかいないのに、なぜ一億総懺悔なのでしょう。

実は、この数字には、日本の植民地であった台湾と朝鮮の人々も加えられています。それで一億なのです。

でも、おかしいと思いませんか。

台湾や朝鮮の人々は当時日本の植民地であり、日本が始めた戦争に有無を言わず参加させられた人々であり、アジア・太平洋戦争には何の責任もないはず。

それにもかかわらず、日本人と一緒に懺悔しろと言うのです。

身勝手な日本人の理屈です。

勝手に植民地にし、勝手に戦争に参加させただけでなく、負けたら懺悔しろと言うのです。

私は、植民地下にあった台湾と朝鮮の人々に、日本は二重の罪を犯したと思います。

一つは、植民地にしたこと、あと一つは戦争に巻き込んだことです。

それでいて、広島や長崎で被爆した台湾や朝鮮の人々には、日本人では無いからと言って何の治療も補償もせず、戦後何十年にもわたってそのまま放置し続けました。

聴くのが辛い話しです。

それでも私がなぜ、メッセージの中でこのような事を取り上げるのかは、日本はたとえどんな事があっても絶対に戦争をしてはならないと言う思いがあるからです。

単に戦争反対ではなく、絶対非戦、即ち絶対に戦争をしないことです。

絶対に戦争をしない・・・。

勇気のいる言葉です。

この言葉を本当に自分のものとするためには、少しずつ、自分の心に、平和の礎を積み上げて行かなければならないと思います。絶対非戦・絶対平和の意志を、心の裡に積み上げ、強固にして行かなければなりません。全ての命あるものへの畏敬の想いを、心の裡に育てて行かなければならないと思うのです。

そのためにも、戦争とは何であるのか、かつてのアジア・太平洋戦争で何が行われたのかをしっかりと知る事が必要です。

中国・フィリピンを始めとした東南アジアへの侵略の事実から始まり、そこで起きたこと、又日本軍の戦死者の多数が戦場で斃れたのではなく、餓死や戦病死であったこと、あるいは又、東京大空襲や広島・長崎の原爆、沖縄戦の事などを知る中で、非戦の意思を積み上げて行くことが大事であると考えます。そして、自分の中で積み上げた絶対非戦の意思を、

次の世代へ伝えて行く、それがイエス様が言われた「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ 5:9、p6）と言う御言葉に生きることだと思います。

私の心を捉えている本は、戦没学徒の手記である『きけ わだつみのこえ』である事を先週申し上げました。そしてあと一つ私の心を捉えているのは、野坂昭如の小説をアニメにした「火垂るの墓」です。『きけ わだつみのこえ』と「火垂るの墓」、私はこの本とアニメに助けられながら、イエス様が教えられた御言葉を生きています。

以上で前半を終わり、後半に入ります。

後半は、ペテロの手紙一から「洗礼は、神に正しい良心を願い求めること」について考えます。

余談ですが、旧約聖書は 39 巻、新約聖書は 27 巻、合わせて 66 巻あります。66 もあるのですから、全てが同じように自分にとって読み易く、関心を引く箇所とは限りません。私にとっても、この「ペトロの手紙」は、福音書やパウロ書簡に比べて読むことの少ない箇所でした。ところが、高校時代、福永武彦の「草の花」と言う小説を読んだ時、冒頭を飾る一つの聖書の言葉に引き付けられました。それは、このペトロの手紙一の第 1 章 24 節、25 節の御言葉です。新共同訳聖書 429 頁下の段です。読んでみます。24 節です。

24：こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、  
その華やかさはすべて、草の花のようだ。  
草は枯れ、  
花は散る。

25：しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」

これこそ、あなたがたの福音として告げ知らされた言葉なのです。

私は、この言葉から、ペトロの手紙に出会いました。

「人は皆、草のようで、  
その華やかさはすべて、草の花のようだ。  
草は枯れ、  
花は散る。

しかし、主の言葉は永遠に変わることがない、との御言葉です。

この手紙の著者が自分の信仰を語るこの御言葉に出会った時、それまで遠かったペトロの手紙が、少し近くに感じられるようになりました。

さて、洗礼の問題に入ります。

今日の説教題である第3章21節後半の御言葉に注目します。

21：洗礼（バプテスマ）は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです。

と言う御言葉です。

この御言葉は、洗礼を受けたいと言う志願者に対する応答の言葉です。

バプテスマは、「肉の汚れを取り除くことでなく」、神様に「正しい良心を願い求めること」だと言うのです。

これが意味していることは、イエス様のバプテスマと深い関わりを持っています。

マルコによる福音書第1章4節から8節、新共同訳聖書61頁をお開き下さい。

お読みします。

4：洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼（バプテスマ）を宣べ伝えた。

5：ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼（バプテスマ）を受けた。

6：ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。

7：彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。」

8：わたしは水であなたたちに洗礼（バプテスマ）を授けたが、その方は聖霊で洗礼（バプテスマ）をお授けになる。」

つまり、預言者ヨハネのバプテスマは、旧約時代の流れを汲む、水による悔い改めのバプテスマ、即ち「肉の汚れを取り除く」バプテスマであったのに対し、イエス様が授けるバプテスマは、聖霊によって「正しい良心」が与えられるバプテスマなのです。

正しい良心とは、今日与えられ御言葉の少し前に記されている箇所によって明らかです。第3章8節以降です。即ち、互いに心を一つにし、同情し合い、兄弟を愛し、憐れみ深く、謙虚である心です。悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、敵には祝福を祈る心です。そのような正しい良心が、バプテスマを受けた私たちには神様から与えられています。

但し、注意しなければならないのは、その良心は、誘惑から絶えず激しく襲われているのです。だからこそ、私たちは日々助け手である聖霊を求めて祈り、誘惑に勝ち、正しい良心に生きることを心がけなければなりません。良心に生き、目標である神の国を目指して走り続けるのです。

洗礼（バプテスマ）を受けることの意味は、神様から真実の良心を与えられることです。

そして、その良心は、聖霊の助けによって、私たちの日々の生活を導き、その支えとなります。洗礼（バプテスマ）を受ける意味は、そこにあるのです。

なぜ、心に信じるだけでなく、口で告白することが求められるのでしょうか。

それは、人として、社会に責任を負う事を意味します。

口で告白する事は、自分の信仰を公に言い表すことです。

その瞬間から、社会はその人をキリスト者として見るのです。

教員時代、私は、授業の中で、必ず自分が教会に通っていること、洗礼を受けキリスト者であることを生徒達に語りました。語るタイミングがあります。私は社会科を教えていたの、歴史の時間、イエス・キリストによってキリスト教が始まったことを皆で学んでいる時、自分がキリスト者であることを明らかにしました。

それ以降は、生徒達は、私がキリスト教の信徒であり、教会に通っていること、そのような目で私を見て行きます。保護者も勿論、同僚の教師も又私をそのような目で見ます。

それが、一人の人として社会に責任を持って生きることだと思います。

ですから、心に信じ、口で告白することが大切です。

洗礼（バプテスマ）を受け、キリスト者となり、平和を実現するようにとのイエス様の呼びかけに応える者になりたいと思います。

祈りましょう。

